

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (15)



～ 「掃除」と「非認知能力」について ～

名蔵小中学校 校長 池田 幸作

名蔵小中学校は、南にバナナ岳、北には於茂岳を望み、東にパインやマンゴー、サトウキビ畑、西にラムサール条約に登録された名蔵アンパルが広がる風光明媚な景観に恵まれています。このような自然豊かな環境の中で、本校の子どもたちは生き生きと学習しています。

さて、全国学力・学習状況調査の実施以来、沖縄県の児童生徒の学力が話題となっていますが、なかなか学力が上がらない要因の一つに「自己肯定感の低さ」が上げられています。本校の児童生徒においても、質問調査「自分によいところがある」の項目が全国と比べると低く、教育活動においても、何となくシャイで行動に消極的な面が見られます。そのような中、石垣市教育委員会は児童生徒の自己肯定感を高める取組「勇気づけの教育」を推進しています。

これからの未来は、先行き不透明とか予測困難な時代と言われて久しくなりますが、ニューヨーク市立大学大学院センター教授のキャシー・デビットソンは、『今の子どもたちが大学を卒業して就職するころ、子どもたちの65%は、今は存在しない職業に就く』と述べています。つまり、私たち教師をはじめ大人は、子どもたちにこれまで想像したことのない社会を切り拓く生きる力をつけてあげなければならないのです。

ところで、最近「ドラゴン桜」(TBS 日曜劇場)で、偏差値の高い子と偏差値の低い子(東大専科)が東大のテスト問題で対決するというシーンがありました。結果は、偏差値の高い子の論理性に欠けた難しい解答に対し、偏差値の低い子(東大専科)のシンプルで分かりやすい解答が勝利しました。その結果に対し、主人公桜木先生は「これからは、多角的な視点やどれだけ本質を考える力があるのかを問う問題が出題される、それは、あらゆる立場の人間の気持ちを想像できるそんな人間が欲しいという大学からのメッセージだ。」と話します。それは、まさにこれから求められる人材の姿、授業の在り方と思います。

新学習指導要領では、未来を切り拓く資質・能力として「生きて働く知識・理解の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」「学びや人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」の3つが示されていますが、これは、これまでの知識を中心とした学力を見直し、「生きて働く力」、「未知の状況にも対応する力」、「学びや人生や社会に生かそうとする力」を求めているということなると思います。桜木先生風に言うならば「これまでの知識は通用しない、本質を見極め自分なりの答えを見つけ出す力が必要なのだ。」となります。

そこで、今年度最初の校長講話では、「選ばれる立場(掃除と勉強の共通点)」と題し、掃除と非認知能力(テストで計れない学力)について話をしました。掃除は、①どこをどの

ような方法で掃除をするか考える「思考力」が身に付く。②次に何をすればいいのか、どうすれば効率がいいのか考える「見通す力」や「段取り力」「対策力」が身に付く。③何がうまくいったか、うまくいかなかったのか、どうすれば改善できるのかという「課題に気づく力」や「メタ認知力」「修正力」が身に付く。④よりよい生活のためにやるべきことをやる「自制心」や「忍耐力」「自己管理力」が身に付く等です。まだまだ、たくさんあると思いますが、これらは、今求められている力であり、自分で学習する際の「学び力」といえます。

日本の学校は、海外の学校とは違って伝統的に「掃除の時間」がありますが、日本人の勤勉さや学びに向かう力は、「掃除の時間」において培われている部分も大きいと思います。実際に子どもたちを観ると「掃除のできる子」は、「素直で伸びる子」が多いと実感しています。「掃除」をすることで、周りはきれいになり、誰もが心地よく、頭も心もすっきりした気持ちになります。そして、何より、自己成長につながる非認知能力が身につく、ということなのです。

自然豊かな環境に立地する名蔵小中学校ですが、その自然豊かな環境にも負けない手入れされた潤いのある学校環境は、朝のボランティア活動を含め、児童生徒職員の掃除力と非認知能力の証だと思います。本校では、掃除をはじめあらゆる教育活動において、子どもたちの「夢実現」につながる非認知能力の育成を「勇気づけの教育」と結びつけて取り組んでまいります。